

## 事業所における自己評価総括表(児童発達支援)

公表	
○事業所名	にじの丘
○保護者評価実施期間	2025年11月1日 ~ 2025年11月30日
○保護者評価有効回答数	(対象者数) 9人 (回答者数) 7人
○従業者評価実施期間	2025年11月1日 ~ 2025年11月30日
○従業者評価有効回答数	(対象者数) 6人 (回答者数) 6人
○事業者向け自己評価作成日	2025年12月15日

## ○分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子どもの発達状況や特性に応じた、柔軟な個別支援と集団活動の両立	当事業所では、集団活動を一律に行うのではなく、児童一人ひとりの発達段階や体調、特性を丁寧に把握した上で、参加方法や役割を柔軟に調整している。個別療育の視点を大切にしながら、無理のない形で集団の中に関われる環境づくりを行い、「できた」「参加できた」という成功体験を積み重ねている。	今後は、個別支援計画と日々の活動内容の連動性を高め、個々の成長が集団活動の中でも実感できるよう、活動目的やねらいを職員間で共有・再確認しながら支援の質向上を図っていく。
2	季節や行事を通して、五感や情緒の育ちを大切に体験型プログラム	季節ごとの行事や制作活動、音楽・感覚遊びなどを取り入れ、子どもたちが楽しみながら自然や文化に触れられる機会を設けている。活動内容は「できる・できない」ではなく、「感じる」「楽しむ」ことを重視し、安心して参加できる雰囲気づくりを心掛けている。	行事や季節活動については、振り返りを行い、子どもたちの反応や変化を次回の企画に反映させることで、より心に残る体験となるよう内容の見直しや工夫を継続していく。
3	保護者に寄り添った、相談しやすい家庭支援体制	日々の連絡や面談、相談対応を通じて、保護者が抱える不安や悩みに寄り添いながら支援を行っている。療育面だけでなく、子育て全般に関する相談も受け止め、家庭と事業所が同じ方向を向いて子どもを支えられる関係づくりを大切にしている。	今後は、保護者同士がつながれる機会や、情報共有の場づくりについても検討し、孤立感の軽減や安心感につながる支援体制の充実を目指していく。
4	職種を超えた連携による、重層的な支援体制	管理者・児童指導員・看護師・専門職がそれぞれの視点を持ち寄り、日々の支援について情報共有を行っている。単独の判断に頼るのではなく、チームとして子どもを支える体制を整えることで、より安全で安定した療育を実現している。	定期的なケース検討や意見交換の機会を設け、職員間の理解を深めるとともに、支援の統一性と専門性の向上を図っていく。
5	記録と振り返りを活かした、継続的な支援の質の向上	日々の活動や子どもの様子を記録し、単なる業務記録に留まらず、次の支援につなげるための振り返りとして活用している。写真や動画なども用いながら、職員間で共通認識を持てるよう工夫している。	記録の活用方法をさらに整理し、個別支援計画の見直しや職員の支援力向上につながるよう、記録と実践を結びつけた取り組みを強化していく。
	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	支援内容の見える化・言語化が職員ごとに差が生じやすい点	支援は丁寧に行われているものの、職員の経験年数や専門性の違いにより、支援の意図やねらいが十分に共有されない場面がある。	支援の目的や関わり方を簡潔に整理した共有様式を活用し、記録やミーティングを通じて支援の意図を言語化する取り組みを進めている。
2	業務量が多く、職員の負担が一時的に集中しやすい点	医療的ケアや個別対応が必要な児童が多く、突発的な対応や書類業務が重なることで、業務の偏りが生じやすい。	業務の優先順位を明確にし、役割分担の見直しや職員間でのフォロー体制を強化することで、負担の分散を図っている。
3	集団活動の内容が固定化しやすい傾向がある点	安全面や体調面への配慮を重視するあまり、活動内容が安定志向になり、新しい取り組みに踏み出しにくい状況がある。	小規模な工夫や短時間で実施できる活動から試行し、子どもたちの反応を見ながら段階的に活動の幅を広げる工夫を行っている。
4	保護者支援が個別対応中心となり、体系化しきれていない点	保護者の状況やニーズが多様であるため、その都度の相談対応が中心となり、支援内容が整理されにくい。	よくある相談内容や支援の方向性を整理し、職員間で共有することで、一定の支援の軸を持った対応ができるよう取り組んでいる。
5	職員間の情報共有が口頭中心になりやすい点	日常的な連携は取れているものの、忙しさから口頭での申し送りが中心となり、情報の抜けや認識の差が生じることがある	記録様式や共有ツールの活用(ソフトやLINE使用)を進め、重要な情報は必ず記録に残すことをルール化し、情報の正確性向上を図っている。
6	支援の成果や成長を数値や形として示しにくい点	重症心身障害児を中心とした支援では、変化が小さく見えやすく、成果を客観的に示すことが難しい。	小さな変化や日常の様子を丁寧に個人ファイルに記録し、写真やコメントを活用しながら、成長の過程を可視化する取り組みを行っている。
7	新しい職員が業務に慣れるまで時間を要する点	医療的ケアや専門性の高い支援が多く、業務内容が複雑であることから、理解や習得に時間がかかる。その分、他の職員に負担が掛かる。	段階的な業務習得を想定した指導体制を整え、先輩職員によるフォローや振り返りの機会を設けることで、安心して学べる環境づくりを進めている。